

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.198
2020.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S.モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第32回 ● 知の昇華とコロボックル・モダン

山内清男以前、加曾利B式は関東地方の「貝塚土器」(他の呼称は「石器時代土器」、「縄紋土器」)の花形であり、モースの大森貝塚に続く陸平貝塚を経て、坪井正五郎は西ヶ原貝塚の遺物を形態学の俎板上に載せ、モースによる進化論とは一線を画す日本先史考古学として最初の歩みを進めた。特に加曾利B式前後の西ヶ原貝塚における把手・突起の形態分類と分布研究が基礎となり、「コロボックル風俗考」では「貝塚土器把手形状の起源変遷」を試行錯誤させ、漸く「異地方発見の類似土器」に至り、完形土器としての「形状」(形態)の一致と「模様」(装飾)の類似に関わる厳密な関係が模索されることになる。こうして把手・突起の類似は、単なる部分的類似に留まらない全体構成を含む類似と強い相関が導出・認識され、改めて沼田頼輔の「大森式」等諸形式の整備へと至る。

このように「コロボックル風俗考」というパブリック・アーケオロジーの実践を専門的見地からも知的刺激とすることで、それを契機として考古学の専門的研究が更に進展する学史的動向を確認した訳であるが、それが今日においてもあるべきパブリック・アーケオロジーの姿として望ましく、改めて坪井正五郎の考古学発達史に観る該期の知的昇華を象徴する新たな段階という意味を込めて、「コロボックル・モダン」と命名する。

とするならば、「コロボックル・モダン」の学史的対象は、把手・突起のみの狭隘な展開に限定すべき特殊な事例に過ぎないであろうか、否、坪井正五郎による形態学理論展開は本質的な分析を獲得するアルゴリズムに特徴があるのであって、一人把手・突起のみに限定される領域ではない。それを確認するために再び「コロボックル風俗考」に戻り、把手・突起と同じく説明を省略する挿図に着目するならば、連載第7回において人類学教

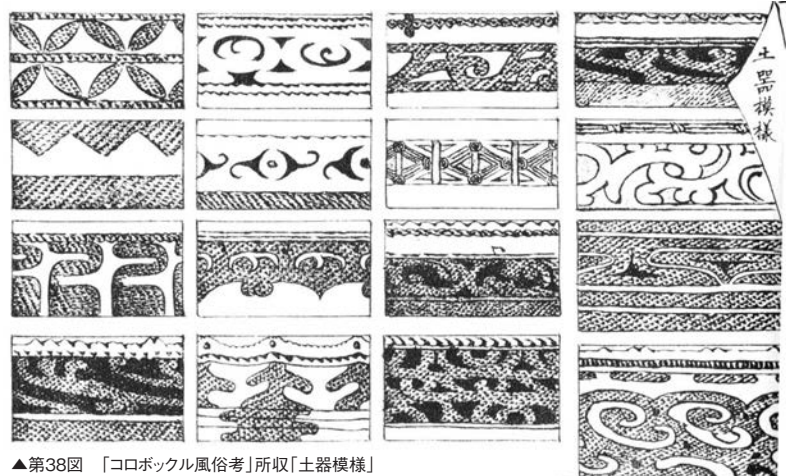
室所蔵の「土器形状」図と「土器模様」図が浮上する。第38図として「土器模様」図を示すが、その対象とはその後には制定される「堀之内式」、「加曾利B式」、「亀ヶ岡式」等であり、文中では「沈紋」と説明されるのみである。

では、第38図は何のために作成されたのか。それを知るために「異地方発見の類似土器」(明治29年4月)に先んじ、「コロボックル風俗考」の最終回と同じ時期から始まる論文「アイヌ模様と貝塚模様との比較研究」(明治29年2月)が注目に値する。坪井正五郎はこの比較研究のために「人間問題考定の一助とする為には国語の研究をするに当っては、詞の調べよりも文法(即ち詞の配置)の調べの方が大切で有るとは人の知る所」(ゴチック体は引用者)として「配置法の如何に由って模様なるものを」「撒布模様」・「並列模様」・「連続模様」と類別し得る新たな「模様文法論」を開陳する。

「模様文法論」に至る背景には「大野延太郎に託して、同教室所蔵の標本其他から両種の模様を写し取らせ」、「アイヌ模様の図版が五十枚、貝塚模様の図版が百二十五枚」という基礎データの蓄積による分析があり、坪井

正五郎による「コロボックル・モダン」とはデータに基づく先史考古学理論の構築を目指しており、山中笑や濱田耕作等による単なる思い付きや印象程度等の意見表明ではないことが分かる。正に「日本考古学の父」に相応しい学問基盤の形成である。

さて、「模様文法論」による具体的な分析は「アイヌ模様」64点、「貝塚模様」73点を用いて翌月の「アイヌ模様と貝塚模様との比較研究(前号の続き)」(明治29年3月)で行われ、結果は「アイヌ模様の特性は並列模様の勝って居る事、貝塚模様の特性は連続模様の勝って居る事と云って宜しい。特に注意すべきはアイヌ模様には連続模様が極めて僅少、貝塚模様には並列模様が極めて僅少との事実でござります。」(傍点省略)の多少事実を始めとして、更に両者の「連続模様」、「並列模様」、「撒布模様」に該当する夫々の模様を比較しても「同様」や「似て居る」とは言えないことから、結論は「私はアイヌ模様と貝塚模様とは更に関係の無いもので、決して同一人民の手に成ったと認むべきものではないと考えます。」(傍点省略:ゴチック体は引用者)と極めて明快である。



▲第38図 「コロボックル風俗考」所収「土器模様」

※巻頭連載は隔月です。次回は太田裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 知の昇華とコロボックル・モダン(第32回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第25回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第191回) 泉 眞奈 …3
■考古学者の書棚 『縄文の奇跡!「東名遺跡」』 忍澤成規 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第25回) ——— 間壁 忠彦・間壁 霞子

6. 吉備真備の祖母骨蔵器(和銅元年・罔勝・罔依母夫人の墓誌銘を刻む)・「それでは何だ?はまだまだあった」(2)

今回はこの長いタイトルの中の人名に含まれた「罔」字のような、則天文字について触れるとしたので、まずは則天文字の実態を下に表示した。これは先回も述べたように、全く私たちの専門外のことであり、蔵中進氏の『則天文字の研究』1995年翰林書房の内容によって作成した表である。ただここに示した則天文字については他に意見も多く、字形の違いも多いようだ。

これらの文字成立時期には時間差があり、途中で変更された文字もあり、かなり厳しく使用が命令されたようで、一方では則天武後の権威失墜と共に、この文字使用は中国では禁止されていた。こうした文字使用の変化で、残された石碑や文献の時代判定の基準にもなったようである。

聖歴	証聖	天授	載初	中興 元号
698以降	694	690	689	西曆
至人 罔 罔 罔 罔 罔	璧(聖)	稭(授)	鳳(君)	翌(照)
			忠(臣)	爪(天)
			薰(載)	埜(地)
			塵(初)	㊦(日)
			犁(年)	㊧(月)
			舌(正)	〇(星)

◀則天文字と成立時期

先回、則天武後は広辞苑にも載る著名人と述べたが、一応の経歴は次のようであるが、ただ生年月日や年令はあまり正確でない。唐を建国した高祖李淵が挙兵したのは623年、この挙兵を経済的に強くバックアップしたという武氏の娘が彼女で、名前は「照」。則天文字の「照」字は、自分の署名だけに用いられているらしい。唐が全国を統一し、太宗が皇帝となりこの年が中国元号の貞観元(627)年、この時彼女は5歳だったという。この2年後に夫となる高宗が生まれている。わが国では、隋に使いを送った聖徳太子は、すでに死去している頃である。

「照」は14才で太宗の後宮に入り、27才で太宗が死去。寺に入っていたが、30歳で再度、高宗に召され宮廷に入ったという。ただ太宗によって、25歳の時から高宗に与えられていたともいう。その後高宗の皇后を廃し、皇后となって則天武后となる。彼女については多くの逸話があるが、高宗の晩年には彼女が実権を握っていたともいわれる。

高宗は56歳で死去。彼女はその時既に61歳とか。その後自分の息子2人を次々に位につけるがそれを廃して、自ら皇帝となり、国号も「周」とした。中国唯一の女帝である。位にいた間は690~705年とされる。

則天文字はその間に制作使用された。また彼女は元号に特別な思い入れがあったのか18回も変更し、元号に用いられた多くの文字が則天文字に変えられている。中国が「唐」でなく「周」と称された間にも製作や写本された文献・碑文拓本などは、

優れた唐代文化として、わが国にも遣唐使がこうした文物を持ち帰っている。その写本が、正倉院の蔵本にもなっている。ただ面白いのは、わが国にもたらされた則天文字のある文献が、わが国で写本される際、当時の書写生が、既に中国では使われて無い文字だと知って、しかも大変書きにくい文字が多いことからか、普通の漢字に直して写した部分も多いようだ。書写生の性格も分かるとか。

ここでは特に、問題の吉備真備の父罔勝と叔父罔依の「罔」字だが、この文字は現代人でも、辛うじて知られる文字だが、その由来は知らないだろう。既に10世紀頃以降の辞書的な書物に「天・日・月・國・年」の文字形例に、則天文字も入りながら、全てただ古字とか、由来不詳となっている。現在その由来を知る人は、明治以後の学習の結果によるものだ。

また奈良時代だからといって、則天文字は決して多いものではない。藤原京・平城京などから出土した膨大な木簡や墨書土器の中でも、見聞きした覚えが無いようだ。岡山県下でも勿論知られてない。ただ近県で、山陰側の島根県出雲国府跡から「山水土」の3字を縦に並べた「地」が墨書された須恵器底部片が1点出土しており、鳥取県では倉吉市の伯耆国庁北背後の丘陵上から「天」字が、須恵器土器底部片に墨書された例を倉吉市博物館長の根鈴氏から教示された。この両者とも、奈良末から平安初期のものらしい。いずれにしても西日本での事例は少ない。

中部地方から関東にかけては、官衙的な遺跡からの、文字資料がかなり多く、平川 南氏の「墨書土器とその字形」『国立歴史民族資料館研究報告 35集』1991.11などに多く集成されている。この中にはかなりの則天文字の存在も示されているが、他の文字に比べると決して多いものでなく、公の場とか、それらの祭祀に関係するもの、時には寺院にも関係したい文字資料のようである。時期も奈良時代末から平安時代にかけてのものが多くようである。これらの中では則天文字は、生活の日常で使用する文字でなく、占いや祈りの形態を示すものに変化していたように思われる物である。

肝心の「罔」字については、次回に「夫人」の言葉と共に見て行きたい。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部助手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。今回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 191

宝塚1号墳 ～三重県松坂市宝塚町・光町

泉 眞奈

今回紹介する遺跡は、私が考古学や埴輪の研究をおこなう原点ともなった宝塚1号墳です。宝塚1号墳は三重県松坂市宝塚町・光町に所在する、5世紀前半に築造された前方後円墳です。全長は111mと、伊勢地域で最大の古墳となっています。

古墳の周辺一帯には宅地開発等で姿を消した古墳がいくつもありました。鈴木敏雄氏による分布調査では88基もの古墳が確認されていたようです。宝塚1号墳のほかにも1基の前方後円墳があるとされているほか、埴輪の有無についても触られています。今では88基のうち、宝塚1・2号墳のほか、4号墳とされる径20mほどの円墳が小学校の敷地内に残されているのみです。

1号墳に後続して北側に築造された2号墳は、全長90mの帆立貝式古墳です。墳形も前方後円墳ではなく、1号墳でみられる多様な形象埴輪は確認されていません。周辺に確認されていた前方後円墳の詳細は定かではありませんが、2号墳の築造後は、この地に大規模な前方後円墳が築造されることはありませんでした。

宝塚1号墳を語るうえで欠かせない事例は、造り出しの調査かと思えます。平成12(2000)年におこなわれた発掘調査では、造り出しと墳丘が土橋で繋がれている状況が明らかになりました。そして、原位置を保つ船形埴輪のほか、冚形埴輪や門形埴輪などの形象埴輪が数多く出土しました。

出土埴輪のなかでも、特筆すべきは全長が140cm、全高が94cmと、日本でも最大級を誇る面向不背の船形埴輪の出土があげられましょう。全長の日本一は大阪府岡古墳の船形埴輪の150cmに譲りますが、高さは間違いなく日本で一番でしょう。

この船形埴輪は、地方のいち首長墳が一躍有名になったきっかけでもあり、現在でも宝塚1号墳といえば連想される埴輪の一つになっているものかと思えます。通常の船形埴輪と違い、太刀や威杖(石見型立物)、蓋きぬがさといったもので飾りたてられた非常に装飾性の高い船形埴輪となっています。また、台座と船本体が別作りになっている点も特徴です。この船形埴輪は墳丘と造り出しとを繋ぐ土橋の近く、谷と称される部分で見つかりました。この土橋状の遺構は少数ではありますが、奈良県の築山古墳や岡山県金蔵山古墳で見つかりました。

谷には冚形埴輪や家形埴輪、門形埴輪が配置されていました。5世紀前半に築造された前方後円墳の調査事例をみると、造り出しと墳丘との「谷」に冚形埴輪などの水の祭祀を表現し



▲宝塚1号墳

た埴輪を置く例が散見されます。築山古墳のほかにも、大阪府心合寺山古墳、百舌鳥御廟山古墳や、兵庫県行者塚古墳、京都府久津川車塚古墳などの近畿地方の古墳を中心にみつかりました。

谷に置かれた冚形埴輪は、1号墳では2個体が出土していません。形はもちろんのことですが、中に表現されるものが大きく異なっています。槽と樋の導水を表現したものと、井戸の湧水を表現したものがありました。特に、槽と樋は家形埴輪の床に一体のものとして成形されています。近年、岡山県金蔵山古墳でも同様のものが見つかりました。

こういった、多様な形象埴輪を立て並べる伊勢地域の古墳は、宝塚1号墳以前には確認されていません。いわゆる中心地域から埴輪祭祀を始めて取り入れた古墳であるといえるでしょう。しかし、埴輪のすべてが中央の埴輪祭祀かと言われると、そうではありません。

造り出しの墳丘側には多くの壺形埴輪が見つかりました。壺形埴輪のなかには在地的な特徴をもつ、伊勢型二重口縁壺とよばれる壺形埴輪がありました。この伊勢型の壺形埴輪は造り出しの上だけではなく、谷部に置かれた冚形埴輪を覆うように配置されるなど、重要な位置を占めています。宝塚1号墳以前に築造された古墳には、伊勢型二重口縁壺形埴輪のみを樹立している例もあり、在地的な要素も数多くみられます。在地の首長と中央の結びつきが強くなった結果、このような埴輪祭祀が採用されたのでしょうか。

中央との結びつきは、宝塚1号墳の円筒埴輪のなかに河内地域の特徴を有する埴輪が少数ながらみられることも事由となるでしょう。形象埴輪や円筒埴輪を立て並べる祭祀が根付いていなかった地域では、埴輪生産の下地となるべきものはなかったと推測されます。ともすれば、河内地域などの中央から、古墳祭祀の指導者が派遣されていたと推定できます。

ここからは遺跡紹介に関連した四方山話になります。実は、私が小さいころに造り出しの発掘調査現場に行ったことがあるようで(あまり覚えてはいないどころか、調査区の外を走り回っていたようですが)、船形埴輪の出土状況も目にしていました。私自身が今現在、全長が日本一の船形埴輪のある場所で働いている身でもありますので、不思議とこの古墳にご縁を感じています。私が最近、家形や冚形埴輪にご執心なも線を迎れば宝塚1号墳のおかげともいえます。

まだまだ話題も尽きませんが、今回の紹介で、皆さまがよりいっそう宝塚1号墳・2号墳に興味を持っていただければ恐悅至極の思いです。願わくは、現地でも復元された造り出しと形象埴輪を見ていただければと思います。

主な参考文献:

福田昭・福田哲也ほか 2005『史跡宝塚古墳』松阪市教育委員会
穂積裕昌 2017『船形埴輪と古代の喪葬 宝塚1号墳』遺跡を学ぶシリーズ
117 新泉社

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは相馬勇介さんです。

考古学者の書棚

「縄文の奇跡! 「^{ひがしみやう}東名遺跡」歴史をめぐりかえた縄文のタイムカプセル」

佐賀市教育委員会編／雄山閣(2018)増補改訂版

忍澤 成視

1 遺跡発見の経緯

東名遺跡は、佐賀県佐賀市に所在する縄文早期末(約7,000年前)の遺跡で、標高3m前後の微高地に設けられた集石炉、墓地を主体とする集落域と、標高0m以下の谷部に形成された貯蔵穴を伴う低地性貝塚からなる。このうち貝塚は、巨勢川調整池建設という公共工事に伴い偶然発見されたもので、たまたま調整池の掘削が地表下5mと、かなりの深度に及んだため、縄文海進の影響で厚く堆積した粘土層下に埋没していた貝塚が姿を現すことになったのである。6箇所から成る貝層の総面積は約1,700㎡、南北500m以上と広域に及び国内最大級の貝塚群で、さらに集落、墓地、貯蔵穴がセットで確認され、当時の生活様式や文化を詳細に知ることができる。したがって、その学術的価値は極めて高い。

2 縄文早期の湿地性貝塚

東名遺跡は、低地性貝塚に分類される遺跡である。貝塚は、多くの場合標高の高い台地上に形成される。当時の海岸部で採集した貝を丸木舟などを使って台地上の集落まで運び、貝の身を食べた後の貝殻を集落の一角に捨て集積したものである。東名遺跡は、この貝の捨て場が、集落近くの川に面した湿地に営まれたものである。貝塚には、貝殻のカルシウム分の影響で、通常の遺跡では消滅してしまう、骨や貝が良好に保存されるため、当時の食料であった貝、獣・魚骨、人骨、骨や貝で作った道具が多量に見つかる。また、湿地遺跡では、土壌中の地下水などの影響で、通常の遺跡では消滅してしまう、樹木、植物の種子など植物質の遺物が多量に見つかるのである。したがって、貝塚も湿地遺跡も、土器や石器のみによらない情報を提供してくれるため、情報量の宝庫と言われるが、湿地性の貝塚は、この「二重奏」であり、まさに「縄文のタイムカプセル」そのものなのである。

3 常識を覆す発見の数々

東名遺跡から発見されたもののうち、特筆されるのは、当時の河川近くで見つかった多数の貯蔵穴と編みかごで、その保存状態は極めて良好で、手の込んだ編み方で作られたほぼ完全な「縄文バスケット」が700点も出土したのである。高さが80cmを超える大型のものが多く、貯蔵穴に伴い、専ら堅果類の水漬け用として使われたと考えられる。その構造はバラエティに富み、国内の縄文遺跡で発見されている編組技法のほとんどが早期末の段階で生み出されていたことがわかった。

また、獣・魚骨などの動物質食料、種子や木の実などの植物質食料、装飾品を主とする多様な骨角貝製品は、当時の生業活動や身体装飾の様子を、さらに埋葬された人骨やイヌは、遺跡を作った主人公の姿や生活様式を物語る貴重な資料である。「最古、最多の記録更新」、東名遺跡出土遺物の多くは、この冠名が付くものがほとんどで、東日本よりも千年以上は早いと思われる西日本の縄文文化の到達度の速さや高さを我々の前に示している。

4 貴重な貝製品の発見

筆者の専門は先史時代の貝製品、特に装身具である。東名遺跡からは、約800点の貝製品が見つかったが、このうち注目されるのは、タカラガイ・イモガイやツノガイ、小型の巻貝を使って作られた貝小玉(ビーズ)、そしてイタボガキ、クマサルボウ、マツバガイ、ベンケイガイ、オオツタノハなど各種の貝輪(プレスレット)である。前者は、日本列島における縄文早期文化に共通するもので、九州にも同様の文化が伝播していたことを明らかにした。後者は、貝輪素材が多様であること、内湾・外洋・島しょ部と、その供給地が多岐にわたることを示し、装飾品素材に対する飽くなき探求心と、遠隔地素材の獲得を可能とする情報網や交易圏が既に約7,000年前の縄文早期末段階で確立されていることを物語る。オオツタノハと呼ばれる日本列島では、伊豆諸島、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島のごく限られた島々にしか生息しない特殊な貝を利用した貝輪が7点も出土しており、もちろん最古の事例となった。

5 国史跡への指定と文化財の活用

発掘調査後の整理、報告書作成では、編みかご、古環境、動物性食料、植物性食料、貝製装身具、人骨、イヌなど、各分野の研究者が分析を行い、その結果をシンポジウムにおいて一般にわかりやすく公開している。そして、前述の遺跡の様々な価値が高く評価され、2016年10月、晴れて国の史跡に指定された。その後、佐賀市教育委員会編で2017年、雄山閣出版から本書が刊行され、カラー写真とわかりやすいイラストをふんだんに使った紙面構成が一般読者に受け入れられ、2018年には好評につき増補改訂版が刊行されている。

国史跡指定前から、出土遺物を教室に持ち込んでの出前授業、ベンケイガイを使った貝輪づくり教室の開催など、地道な文化財活用事業が展開されている。貝製品の研究者として、本遺跡出土資料の分析と貝輪づくりなど普及活動の一部に携わった者として、史跡指定とその後続く活発な活用事業展開は嬉しい限りであり、今後も協力していきたいと思っている。



アルカ通信 No.198

発行日 2020年3月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp